救済の多様性　天理教⑥

天理大学国際学部教授
山田　政信　*Masanobu Yamada*

（4）カルデシズムの場合

ヴァウデリオは母の影響を受けてカルデシズムの信者になった。熱心な信者ならばたいていそうであるように、彼も数々の教義書を読んで教えに精通するようになった。彼にとってカルデシズムは宗教のみならず哲学でもあり科学でもあるという。このことも多くの熱心な信者に共通する。彼は子弟への伝道グループのメンバーとして活動した経験があるというように信仰継承にも熱心だった。天理教を知ったのは娘の病気を通してである。彼の母親が娘を病院に連れていく途中、天理教の教会長が声をかけ、救済儀礼である「おさづけ」を取り次ぐと熱が下がったことが入信のきっかけになった。

その後、すぐに天理教を信仰し始めたわけではなかったが、新たに娘が手術を受けなければならない状況になった時、彼は教会長を頼ることにした。というのも、教会長から「15 才までの身上（病気）や事情は親の「いんねん」によるものだから、親自身の運命を変えなければならない」という話を聞かされたことが強く印象に残っていたからである。

天理教の人類創世神話である「元の理」によれば、人間は陽気に暮らすため「心の自由」を許された者として神によってつくられた。教祖は、人間は神の守護を受けるなか成長を遂げてきたが、「心の自由」を持つがゆえに気侭な考えを起こして心に「埃」を積んできたと説く。そして、「埃」が掃除されることなく積り重なると、災いの元となる「いんねん」になると教える。

一方、カルデシズムでは神によって造られた「ゼロの点」では、あらゆる霊は不完全だった。霊は「自由意志」によって生成流転した結果、善を行う霊もあれば悪に陥る霊もあった。この世における不平等はそうした霊の進化の度合いによって決定されると教えられている。

このように天理教とカルデシズムでは、「心の自由」と「自由意志」、「心の成人」と「霊の進化」という教えの照応がみられることがわかる。このような教理の連続性は、カルデシズムを学んだ人々にとって天理教の理解を容易にさせている。また、天理教用語のポルトガル語訳では、「心」が espírito（「霊」の意味）と訳されていることもその連続性を強めている。

ヴァウデリオは次のように語る。

> 個人の信仰が人生を変えるんです。自分自身の霊を研いていけば、より良き人間になれるんです。カイチョウサンと話しをしているとすでにカルデシズムでベースができていると感じました。初めて天理教の教えを聞き始めたころでも、何だかすべて知っていることを聞いているような印象を持ちました。

すでに論じたように（Vol.15 No.5 ～ 8）、カルデシズムでは人間の「自由意志」を説き、「慈善活動」の実践で霊を進化させることによって、やがては神に抱かれる永遠の生を享受すると説く。そして、天理教でも神は人間に「心の自由」を与えており、人間は身体を借りている事実への感謝を示す行為として「ひのきしん」を行うことで「心の成人」を遂げることができると説明する。

しかし、ヴァウデリオによれば二つの教えの違いは病気を起こす原因の説明の仕方にあるという。

> カルデシズムで新刊本が出たら必ず買って読むことにしています。天理教の教えと比べてみると根本は同じだと思います。でもオヤサマの教えはより深く説明していると感じます。天理教とカルデシズムの違いは人間の病気の原因の説明の仕方にあります。天理教では原因は本人にあると説きますが、カルデシズムではその点は明らかではありません。もちろん、今後、霊による自動書記によって明らかになるのかもしれませんが。

天理教で「病気を起こす原因」は「心の埃」にあり、それが結果するところの「いんねん」にある。ゆえに、「心の埃」を払って「いんねん」を良くしていけば病気が治るとされる。さらに、「元の理」で示される「十全の守護の理」をもとに語られる「たすけの理話し」は、「心の埃」を払うための指針としても用いられる。

カルデシズムでは、身体は肉体と霊体、それにその二つをつなぐペリスピリト（霊包体）からなると説かれる。ペリスピリトは肉体のすぐ外側にあり、その外側に二つの回転方向の違うオーラが取り囲んでいる。病気はこの二つのオーラがダメージを受け、バランスを崩したときに起こる。バランスの崩れは、死者の霊が憑依することによっても起こるが、個人の定められた「カルマ」によるとされる。ヴァウデリオはじめ、カルデシズムから天理教に入信した人々は「カルマ」とは「いんねん」であるという。また、病気はその人の霊的成長を促すための重要な試練であるともいう。

たしかに、病気を起こす原因の説明には天理教とカルデシズムで違いがあることがわかる。しかし、結局のところは「いんねん」を良くすることが「心の成人」や「霊の進化」となり、救済につながるということが共通している。そして、espírito の「成人（成長）」と「進化」という二つのイメージは、ポルトガル語でほとんど重なることになる。

とすれば、カルデシズムの元信者らが「教祖の教えはより深い」とか、「天理教の方が掘り下げた教えだ」、また「天理教の方が優れている」と語る理由をどのように考えればいいのだろう。

ここで、ヴァウデリオの語りの中に一つの解答を見出したい。彼は「原因は本人にある」という内省的かつ内心倫理的な自己理解に立つ救済観を指摘している。彼にとってこうした天理教の教えは説得的だったとみられる。カルデシズムでは死者の霊が誰かに取り憑くことも病気の原因になるという。しかし、天理教の救済観に立てば、そもそも死者の霊が特定の個人に憑依するのは、その個人に憑依されなければならない理由、すなわち「いんねん」があるからだということになる。天理教は、病気の原因を憑依とそれをもたらす他者の霊にあると見做して外在化せずに、その現象が起こる必然性を内在的に捉え、苦難に苛まれている本人に求める。こうした理解はカルデシズム信者にとって「より深い解釈」として見なされるだろう。

また、人類創世の経緯は、カルデシズムでは「ゼロの点」があったと記されているのみだが、天理教では「元の理」という創世神話で説明し、それはまた救済神話としての意味を持つ。カルデシズムでは「霊の進化」によって、より高次の教えがもたらされると理解するから、信者らは天理教をカルデシズムの延長線上に置いて、より説明が詳しく、さらに進化した教えとして位置づけることになるのである。